

【研究テーマ】

主体的・対話的で深い学びの実現に向けた単元構想の在り方について ～思考ツールや単元導入を重点とした生活科・総合的な学習の時間の授業づくり～

野洲市教育研究所 研究員 松井 敦志

内容の要約

本研究では、生活科・総合的な学習の時間での3つの視点（①発見・蓄積②分析・整理③再構築）を段階的に踏まえた単元構想を作成し、思考ツールや単元の導入のデータ分析を生かした授業づくりを行った。教員が単元構想シートを基に単元構想を練ることで探究のサイクルを意識した単元構想ができた。また、思考ツールを活用し、授業を行うことで、思考ツールを使った経験のある児童が増え、使うことで自分の考えがまとめやすくなったと実感している児童が増えた。単元導入での工夫として、データ（地域の人口割合）を使った授業作りを行い、児童が地域の課題を知り、探求していきたい「問い」を見出すことができた。

キーワード

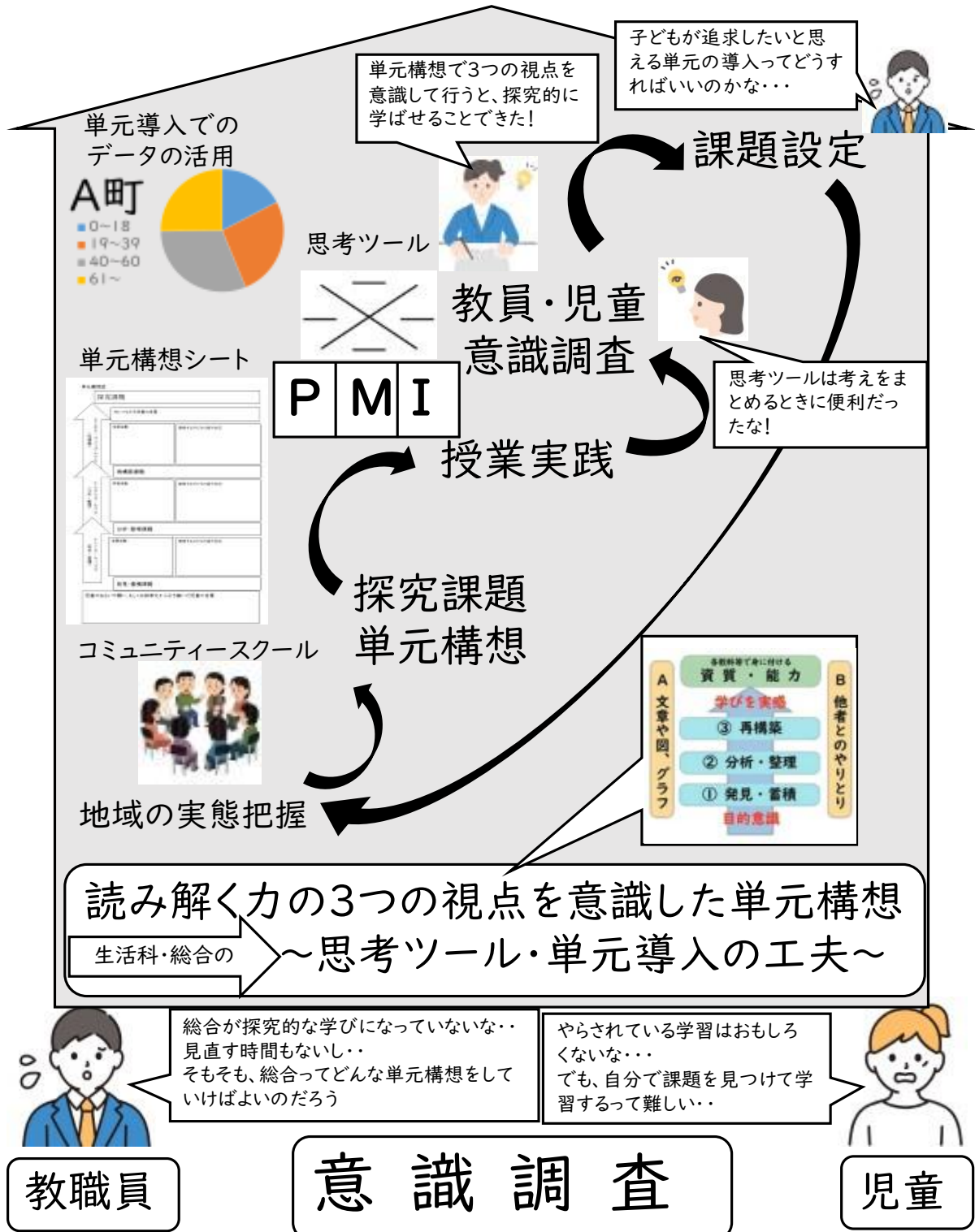
単元構想 読み解く力の3つの視点 探究のサイクル コミュニテースクール 地域の実態
思考ツールの活用 単元導入の工夫

目 次

I 研究テーマ設定の理由	1	(2) 単元構想シート活用の単元構想と思考 ツール活用の授業実践	
II 研究の目標	1	「1年生 生活科 単元名だいすきいっぱい 三上の秋を楽しもう」	10月～11月 8
III 研究の仮説	1	(3) 単元構想シート活用の単元構想と単元 導入の課題設定を工夫した授業実践	
IV 研究の進め方	2	「6年生 総合 単元名 してほしい みかみのこれから」	1月～2月 11
1 研究の方法	2	(4) 総合的な学習の時間の単元構想と思考 ツールに関する教員と児童の意識の変容	13
2 研究の計画	2	VII 研究のまとめと今後の課題	
V 教員や児童・生徒の実態と研究の内容	3	1 研究のまとめ	15
(1) 児童・生徒、教職員の質問紙調査から 捉える野洲市の課題	3	2 今後の課題	15
(2) 質問紙調査から捉える教職員の思考 ツールの活用状況と児童の意識について	4	文献	15
(3) 地域の実態把握と単元構想の立案	5		
VI 授業実践とその成果	7		
(1) 単元構想シート活用の単元構想と思考 ツール活用の授業実践 「4年生 総合 探究課題 3Rについて 学び、できることを考えよう」	7		

令和6年度研究の概要図

主体的・対話的で深い学び



【研究テーマ】

主体的・対話的で深い学びの実現に向けた単元構想の在り方について ～思考ツールや単元導入を重点とした生活科・総合的な学習の時間の授業づくり～

野洲市教育研究所 研究員 松井 敦志

I 研究テーマ設定の理由

滋賀県では、主体的・対話的で深い学びの実現に向けて「読み解く力」の視点を踏まえた授業改善に取り組んでいる。読み解く力は、3段階の視点から成り立っていて①発見・蓄積②分析・整理③再構築となっている。この段階を踏むことで深い学びが実現できるようになると考えられる。この「読み解く力」の視点を重視して、授業が行われてきたのが生活科であり総合的な学習の時間（総合学習）である。しかしながら、学校によっては決まった内容を進めるだけの学習となり、探究的な側面が失われていることも少なくない。そこで、単元構想を考え直すことで児童の姿や言葉から学習課題を立て、それを解決していくことが可能になると考えた。そのために研究協力校に依頼し、生活科と総合学習の単元構想を一から見直すことから研究していきたいと考えた。

豊かな体験や協働的な学習が何度も繰り返されることで、児童一人ひとりが自分の思いや願いをより深く高みのあるものに再構築することができ、それが自分の生き方につながっていくと考える。本研究では、次の3つを重点として授業づくりに取り組んでいく。

- ①3つの視点を踏まえた単元構想（単元構想シートの活用）
- ②考えを再構築するための手立て（思考ツール）の工夫
- ③単元導入の工夫を行い、そこから生まれる児童の思いや願いによる課題の設定

このような授業づくりを通して、他者から学び、考えを再構築する児童の姿を目指したいと考え、本テーマを設定した。

II 研究の目標

3つの視点から考える単元構想を基にした授業づくりを通して、主体的・対話的で深い学びを実現させる授業のあり方を明らかにする。

III 研究の仮説

3つの視点を基にした単元構想づくり（単元構想シートの活用）によって、教師が探究のサイクルを意識することで、児童に探究の良さを実感させることにつながるであろう。また、思考ツールを活用したり、単元導入を工夫したりすることで、主体的・対話的で深い学びにつながるであろう。

Ⅳ 研究の進め方

1. 研究の方法

- (1) 研究協力校の研究主任との協議により、該当校の実態把握や課題分析をし、研究の計画を立て、本研究の目標に沿って研究の具体的な見通しを立てる。
- (2) 研究協力校の実態や課題を踏まえ、3つの視点を通して考える単元構想を練り、研究協力校の全体計画の見直しを図る。
- (3) 児童、教職員への事前アンケートを実施し、実態を把握して指導者と協働で授業づくりに取り組む。
- (4) 授業における児童の姿や振り返りの記述等をもとに、指導者との協議を通して、授業改善に取り組む。
- (5) 児童、教職員への事後アンケートを実施する。それを基にデータを分析し、事前アンケートとの比較を行う。また、指導者の授業づくりに対する意識の変容等から、児童が考えを再構築し、深い学びをすることができたかについて検証する。
- (6) 研究の成果と課題についてまとめる。

2. 研究の計画

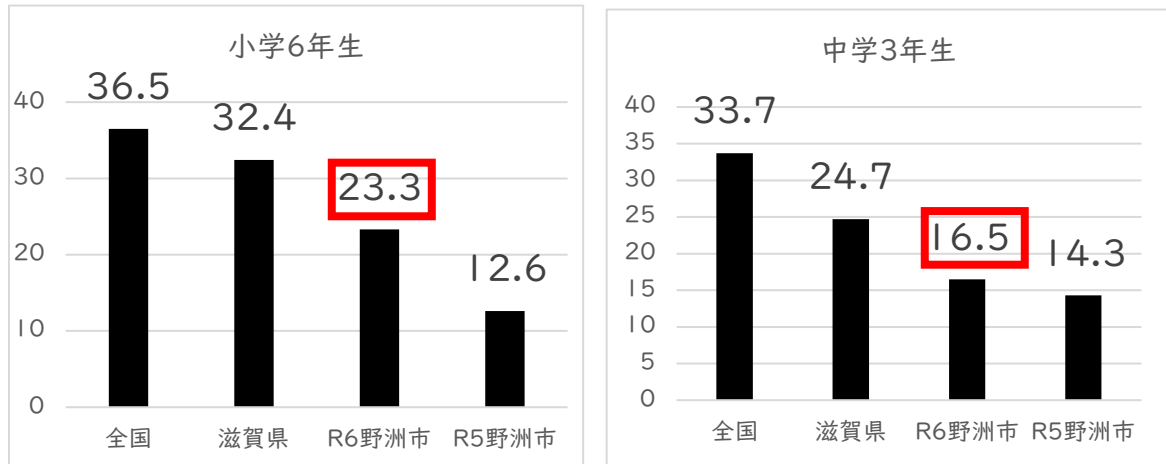
4月	研究構想、研究計画の立案
5月～11月	単元構想、授業づくり、研究協力校での実践（生活科・総合的な学習の時間） 事前アンケート（児童、教職員）の実施、 研究協力校の校内研究会（10回）・研究推進委員会（4回）への参加
11月～1月	研究成果・課題の分析とまとめ
2月	研究紀要の執筆、発行
2月～3月	野洲市教育研究所展における研究発表、研究協力校への研究成果報告

V 教員や児童・生徒の実態と研究の内容

(1) 児童・生徒、教職員の質問紙調査から捉える野洲市の課題

令和6年度に実施した全国学力学習状況調査での質問紙調査の総合的な学習の時間に関わる結果が図1である。

総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて、情報を集め整理して、調べたことを活用するなどの学習活動に取り組んでいますか。(当てはまるに回答した割合(%))



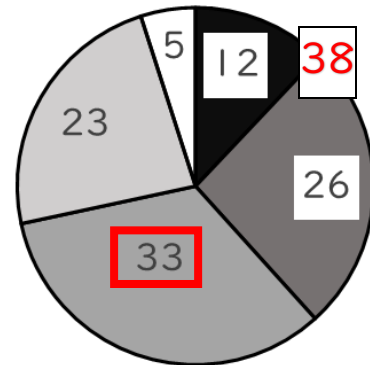
※割合は四捨五入であるため、合計が100%にならない場合がある。

図1 R6年度(野洲市のみR5年度も含む) 全国学力学習状況調査質問紙調査の結果

本市の学校では児童、生徒共に「探究のサイクルを意識した総合の学習に取り組んだ」に対して「当てはまる」と回答した割合が小学校で23.3%、中学校で16.5%である。この割合は、滋賀県や全国と比較して低い。強い肯定である「当てはまる」と回答できる割合が低いのは、教員が探究のサイクルを意識して単元を構成できていないからではないか。そのため、児童・生徒も意識することができず「当てはまる」と回答した児童・生徒が2割程度になってしまったと考えられる。

そこで、本市内の教員に対しても総合学習に関する質問紙調査を行い、実態把握を行った。(図2)「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と答えた割合が38%。また、最も多かった回答が「どちらともいえない」で33%であった。また、記述式で「総合的な学習の時間」の授業づくりで困っていることや疑問」を回答してもらった。その中でも、単元構想に関する内容が図3である。

「総合的な学習の時間」では、読み解く力(①発見・蓄積②分析・整理③再構築)のサイクルを意識して単元構想を考えている。



■ そう思う ■ どちらかといえばそう思う
■ どちらともいえない □ どちらかといえばそう思わない
□ そう思わない

(数値は%, 7~8月に実施(141名))

※割合は四捨五入であるため、合計が100%にならない場合がある。

図2 野洲市教員の総合的な学習の時間の意識調査結果

(単元構想)

自分の進め方が合っているか分からない。

学校ごと地域ごとの特性に合わせるので、単元計画を作るのが難しい。新しいことをするのが難しい。

現状、単なる人権学習や職場体験などで終わってしまっている。それは本来の総合学習ではないと思うが、自分一人ではどうしようもできない。

地域や子どもたちの実態にあっているものを選定できているかわからない。年間、学期を通して取り組む以上準備に時間がかかってしまう。

3年生の社会科の学習内容と非常に似ていることになるため、児童が混乱する。3年生から学習する教科が多く、負担に感じている。

前年踏襲、内容ありき。教師都合で進めている。

系統的・体系的に取り組みたいと思っているが、なかなか難しく感じています。

時数の確保が難しい。

地域教材を活用して学び時間を確保しつつ、学びを深める活動の時間もとらなければならないことが単元を計画する上で難しい。児童一人ひとりの学力にばらつきや差がある中で主体的に活動できるような工夫が難しい。

どんな学習をしていけばよいか。学校として系統立ててもらえるとよい。

図3 野洲市教員の総合的な学習の時間の単元構想に関する困っていることや疑問

このことから、単元構想の見直しや立案には多くの時間がかかることで例年踏襲、内容ありきの総合学習になっており、自信をもって「そう思う」と答えられない教員が多くいるのではないかと考えられる。探究のサイクル(課題の設定→情報の収集→整理・分析→まとめ・表現)は3回以上回すことで、児童・生徒に深い学びを促すことができる。その重要性の認識が低いことも考えられる。それにより、1学年に扱われる単元が多くなり、探究のサイクルを行うことが困難になっていると考えられる。質問紙調査の結果から、探究(読み解く力)のサイクルを意識した単元構想を行っていくことが本市内の課題として挙げられる。

(2) 質問紙調査から捉える教職員の思考ツールの活用状況と児童の意識について

思考ツールの活用状況について市内の教職員に質問紙調査を行った。

思考ツールの使用についての回答結果が図4である。「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と答えた割合は41%であった。また、「そう思わない」「どちらかといえばそう思わない」の合計は33%で使う人とそうでない人の2極化の状態にあると考えられる。また、「思考ツールを使う時に意識していることやうまくいった取組」に対する回答が図5である。思考ツールを使っている指導者は、有効性を実感し、ツールごとの活用法を見出していることが見て取れる。

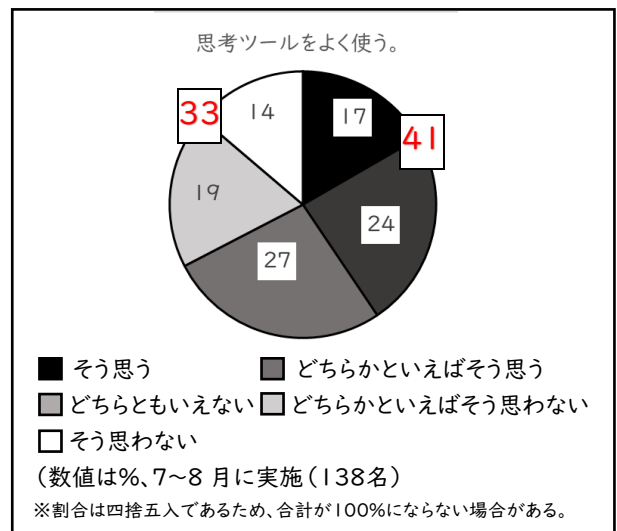


図4 野洲市教員の思考ツールの使用に関する意識調査結果

(メリット)

考えが共有しやすい

思考ツールを有効に使うことで、児童の考えが広がったり、まとまったりしていくことを実感しました。

思考ツールを使うことで、子どもの意見の変化を視覚化し、意見の変化・思考の変化を感じ取ることができるようにした。

思考ツールは同一のテーマでたくさんの人の意見をまとめることに適していると思っている。

思考ツールがあると会話が膨らみやすい。

(活用の具体例)

話し合うときに思考ツールを使うと盛り上がってうまくいった。

自分のイメージをふくらませるのに、イメージマップを使うことは有効

定期的に活用することが大切。そうすることで子ども自身も活用することができるし、前時と比べてどのように変わったか分析することができるから。

学級会で児童と共に意見や考えを整理し、有効に使えた。

全体の場でたくさん意見をまとめるのに役立つ。板書より、あとからも見返せれるように拡大印刷をして黒板に貼ることが多い。付箋でのKJ法などは意見がたくさん出て良かったです。

マインドマップやフィッシュボーンを利用した活動では、生徒交流を行いながら活発な授業展開になった。

ベン図でインタビュー内容をまとめた

ウェビングシートは自分の思考を繋げるにあたり、効果的だと思う。総合的な学習の時間以外でも、使える教科は多いと思う。言葉を繋いでいくので、文章を考えにくい子もできる。

アイデアを出すためにイメージマップを使うと生徒が自分の考えを整理することができた。

とりあえずイメージマップは色々使える。

ベン図、マトリックス、座標軸、クラゲチャート、ピラミッドチャートはかなり有効

図5 野洲市教員の思考ツール活用のメリットや活用事例

また、研究協力校の3～6年生に思考ツールについての質問紙調査を実施した。

「思考ツールを使うことが好きだ」と「思考ツールを使うと考えがまとめやすい」の結果をクロス集計したのが図6である。この結果から、思考ツールを使い、好きだと感じている児童は考えがまとめやすくなったと実感していることが分かる。つまり、思考ツールを使うことで考えがまとめやすかったと児童が感じることであれば、思考ツールをより活用できるようになるはずである。先程の教職員の調査と合わせて推測すると、児童が思考ツールを「好きだ」と感じるほどの経験を積みせられていないのではないかと考えられる。思考ツールにつ

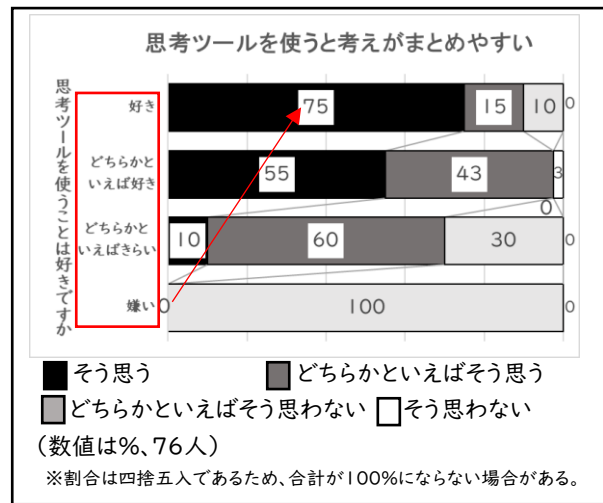


図6 児童の思考ツールの意識に関するクロス集計結果

いて、まずは、活用していくことが重要であり、その上でどんな場面でどのツールを使えばよいのかが見えてくる。そのため、本研究でも、思考ツールを活用した授業実践を計画していきたい。

(3) 地域の実態把握と単元構想の立案

○コミュニティ・スクールでの思考ツールを活用した地域の実態把握

研究協力校の単元構想の立案をするために、まずは地域の良さや問題点を整理、分析していった。その際、コミュニティ・スクールを活用し、6月に地域の方7名と教職員が合同で協議会を行った。(図7)

協議会までに教職員は校区マップを使い、地域における教育資源を付箋で貼り付けた。協議会では、地域の方から地域の良さや地域復興への思いを伺った。その後、把握した地域の教育資源をマトリクス表に整理していった。(図8)

マトリクス表に分類されていくことで、地域の実態が視覚的に整理された。教員にとっては、様々な探究課題ごとの地域における教育資源が明確になった。これにより、国際理解や科学技術の課題は地域での深まりや広がりが難しいことが分かった。逆に、伝統文化や環境に関する課題は、地域を活かした探究学習を実現できる可能性が高いことも分かった。このマトリクス表から、学年別にふさわしい探究課題を設定し、それを基に単元構想を考えた。



図7 コミュニティスクールを活用した協議

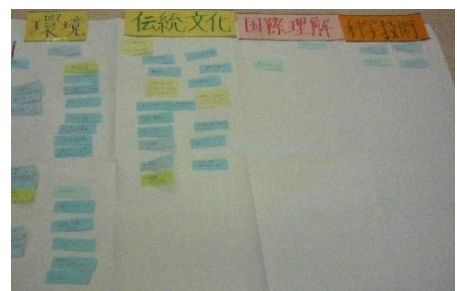


図8 探究課題ごとの地域教材のマトリクス表

また、総合学習や生活科では地域に根差した学習が不可欠である。その面でも、学校運営協議会を活用し、協議員の方と教職員が協議できたのは有意義であった。また、参加した協議員の方にとっても地域を見つめ直し、教職員と共に学校を育てていきたいと思える時間となった。(図9)

- ・とても楽しくなごやかな雰囲気でもよかった。学習の中で子ども達も地域を大好きになってほしい。
- ・人数が要る分、多数の意見がでておもしろかった。普段、教職員と一緒にすることがないので、学校の良さがここからも感じ取れた。
- ・有意義で良い研修だった。後は、出た結果に対してどう行動できるのか。学習に結び付け、子どもに地域の良さを知ってもらい、地域を育てていきたい。
- ・教職員の方も参加した会議となり、お互いの思いが分かり合えたのでよかった。今後は出てきた課題をどう授業に落とし込むかが大切。
- ・先生方は日頃から子ども達に接しているが、協議会メンバーは限られた中での関わりになるので、見方がやや異なる。双方の思いを合わせてまとめていってほしい。
- ・地域を改めて見つめ直すことができた。これからも自分にできることがあったら一生懸命に協力をしていきたい。
- ・なごやかにディスカッションができてよかった。この大人の雰囲気が子どもに伝わって、穏やかにたくましく成長しているのだと感じた。

図9 運営協議会に参加した学校運営協議員の感想

○単元構想シートを活用した単元構想の立案

読み解く力の3つの視点(①発見・蓄積②分析・整理③再構築)を意識して単元構想を立案するにあたり、独自の単元構想シートを作成した。(図10) 事前のアンケート結果(図2、3)から、総合学習で単元構想を考える時に、3つの視点を意識せずに練っている教員が多くいることや単元を計画することに対して苦手意識をもっていることがわかった。そのため、できる限り簡便に使えるようにシンプルな内容にした。

教員は、児童の思いや願い、引き継がれた言葉から段階的に3つの視点の課題を設定していく。このシートに当てはめて考えることで、自然に探究のサイクルを意識した単元構想になる。そして、そのサイクルを児童も意識して取り組めるように、授業で使う言葉として「感じる・見つける」「考える・分ける」「まとめる・表現する」に置き換えた。

単元構想シートを活用し、グループで単元構想の作成を行った。段階的に3つの視点の課題を設定したことで、期待する児童の姿や発言から単元を組み立てていくことができた。また、単元全体の流れを意識して単元構想を立案することができた。

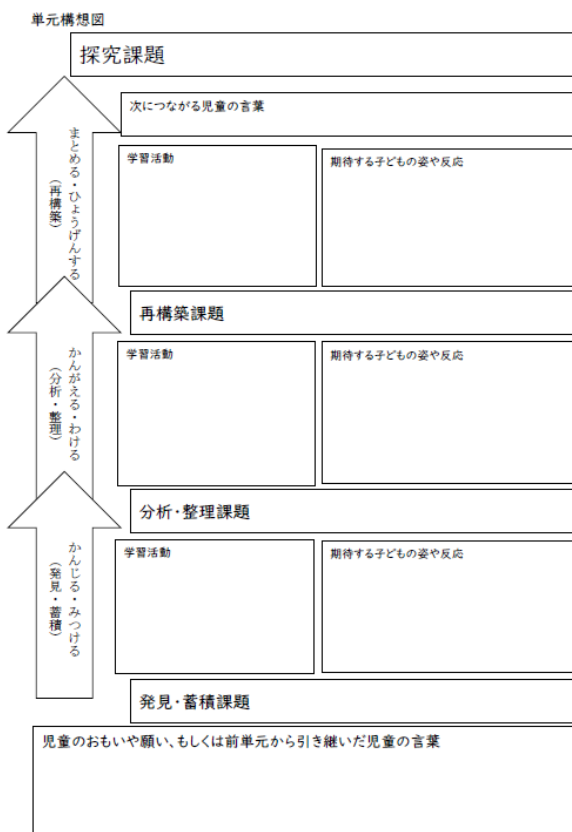


図10 3つの視点を意識した単元構想シート

VI 授業実践とその成果

(1) 単元構想シート活用の単元構想と思考ツール活用の授業実践

「4年生 総合 探究課題 3Rについて学び、できることを考えよう」9月～10月

4年生の探究課題を「3Rについて学び、できることを考えよう～リデュース・リユース・リサイクル～」に設定し、単元構想シートを活用して、単元構想を立案した。単元構想については、図11の通りである。

1学期までの社会科や総合学習では「ゴミの種類やごみ処理の方法」などを学んでいる。2学期は「ごみを減らすためにできることは何か」を調べたり、まとめたりすることで、3Rについて学び、実践する姿を目指した。

本実践として「自分が知っているごみを減らす方法」を思考ツール(Yチャート)で分析・整理する場面を設定した。(図12)まず、「自分が知っているごみを減らす方法」を付箋に書く。その後、グループで「家庭・学校・地域」の3つの視点にYチャートで分類する。それをもとに全体で交流し、様々な視点でのごみを減らす方法をまとめさせたいと考えた。(図13)

本時では、事前に想定したよりも多くのアイデアを付箋に書く姿が見られた。グループでYチャートに分類する活動でも、児童が「この方法は地域やな」「私のはどの視点に当てはまるのかな。」など対話的に学ぶことができた。(図14)また、思考ツールを使わない話し合いでは、まったく発言できなかった児童が、自分の考えを言いながら付箋を貼る姿やグループの友達に自分の考えを相談し、分類してもらう姿も見られた。思考ツールを活用することは、対話的に学ぶことが苦手な児童にとっても有効であるといえる。



図14 Yチャートを使い対話的に分類している様子



図13 アイデアを分類したYチャート

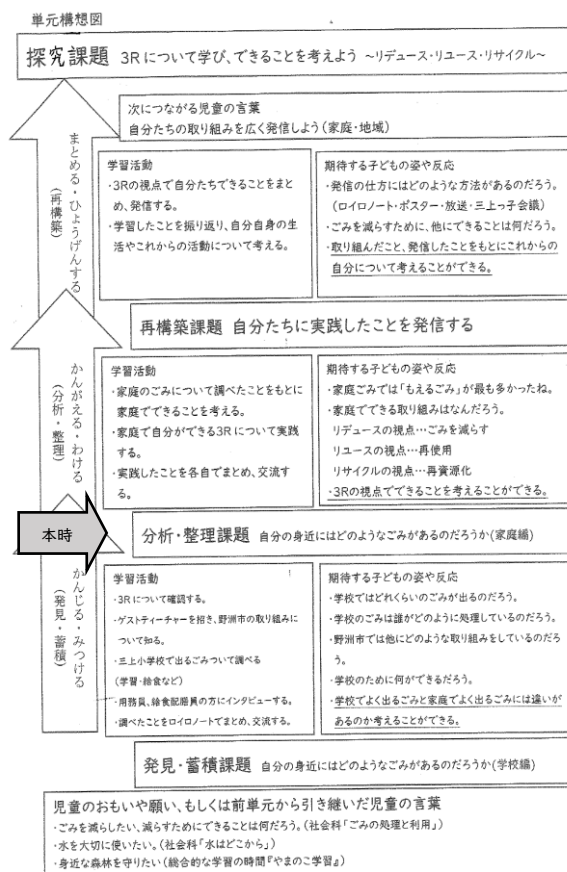


図11 総合 4年生単元構想図

	○主な学習活動・支援	期待する子どもの言葉 ○評価規準(評価方法)
導入	○本時のめあてや学習の流れを確認する ごみを減らす方法をみんなで考えてみよう	
展開	○ごみを減らすために「ごみ減らし隊」の方がされていた話や三上小学校のごみの現状について思い出し、画用紙と付箋を用いて共有し話し合う。(Yチャート) ・何について話し合うか課題を提示し、視点をしぼる。(学校・地域・家庭) ・最初にYチャートの使い方を大型モニターで提示しながら確認する。 ・学校で出た皆さんのごみの写真や「ごみ減らし隊」や野洲市の取り組みについてまとめた資料などを黒板に掲示しておくことで、感じたことや職員さんの思いを話し合いに生かすことができるようにする。	・ごみ減らし隊の人が3Rの大切さを教えてくれたよ。 ・燃えるごみの40%は紙ごみだったよ。 ・雑紙としてリサイクルできる紙にはいろいろな条件があると教えてくれたよ。 ・学校では、家庭と同じように燃えるごみがとても多かったよ。 ・学校のごみには、木の枝や葉っぱもあったよ。 ・『学校』でできることを考えるなら、1年生から6年生の誰でもできることを考えないかね。 □思辨表(行動観察・発言・思考ツール)
まとめ	○学習のまとめをする。 ・学校、地域、家庭のそれぞれでできることを考える。 ○学習の振り返りと次時にしたいことを考える	・家でごみを小さくして減らしてみたいな。 ・全校に呼び掛けて、ごみを減らすようにしたいな。 ・地域でできることがあまり出なかったから地域で取り組んでいることが知りたいな。

図12 総合 4年生指導案

課題として、Y チャートを分類する視点が「家庭、学校、地域」が適切ではなかった可能性が挙げられる。「ゴミを減らす取り組み」の内容が3つの視点に分類することができず、多くのアイデアが境界線に集まってしまった。(図15)授業のまとめでグループごとの Y チャートを掲示し、全体の共通点を見出していこうとしたができなかった。

事前に指導者がYチャートを使い、分類し、児童の反応を予測することで、境界線の意見が多いなどの課題を見通すことができたと考えられる。思考ツールを活用する時に、どのような視点でまとめさせるかは児童の思考を深めるうえで重要であると感じた。



図15 グループごとの Y チャート

(2) 単元構想シート活用の単元構想と思考ツール活用の授業実践

「1年生 生活科 単元名 だいすきいっぱい 三上の秋を楽しもう」10月～11月

地域の自然を堪能し、それを生かした遊びに取り組むことで秋の魅力に浸ってほしいと考え、探究課題を「だいすき いっぱい 三上の秋を楽しもう!」と設定し、単元構想シートを活用し、単元の計画を行った。(図16)

単元の最初に春や夏の写真から季節の様子の変化に関心を持たせた。その後、学校内で秋見つけをし、児童からの「近所の神社が秋の自然がいっぱいある。」という発言を受けて、神社での秋見つけを行った。

単元が進むにつれて、児童が秋の魅力に浸っていく様子が見られた。(図17・18)

児童 A

神社での秋見つけでは、ドングリの形や大きさの違いに着目したり、自分の気に入った形や大きさのドングリや葉を持って帰ったりしている様子が見られた。

日常生活でも通学路や近くの校庭などで気になる「秋の自然」を見つけ、学校に持ってきた。

秋の遊び作りでは、どんぐりの大きさの違いを活かして「相撲あそび」を考えた。



図17 児童 A の秋の魅力に浸っていく様子

単元構想図(生活科)

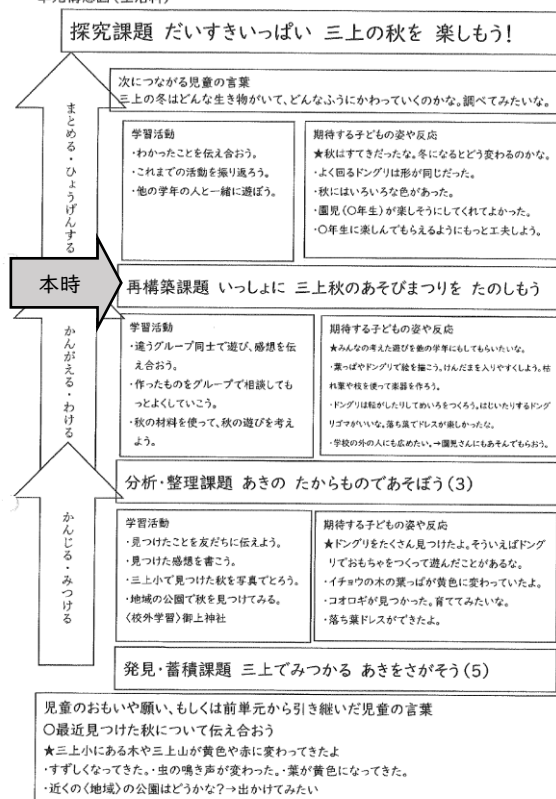


図16 2年生 生活科 単元構想図

児童 B

神社での秋みつけの時には葉の色や形の違いに着目し、「黄色と赤色が混じってるねん。」「たくさん色見つけたいな。」など秋の自然の特徴に気づく様子が見られた。

秋の遊びを考える時には、透明のコップの中に茶色の落ち葉をいっぱいに入れて、その中に黄色のイチョウを宝物として探す「宝探し」を考えた。



図18 児童 B の秋の魅力に浸っていく様子

単元の途中で学習を振り返る時間を設定した。指導者が、学習を振り返りながら「だいすきいっぱい三上のあきを楽しもう」掲示物(図19)を児童と一緒に作っていった。このことで、1年生も自分達の取り組みを振り返ったり、今後の学習に見通しを持ったりすることにつながった。

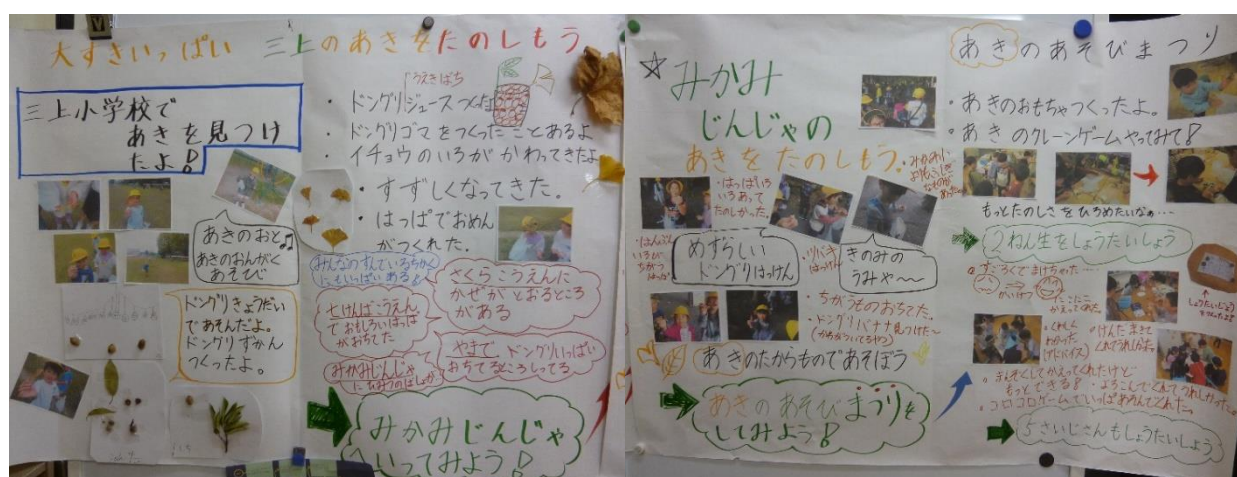


図19 大好きいっぱい 三上の秋を楽しもう 単元を振り返り、まとめた掲示物

自分たちで秋の遊びを楽しむ中で、「自分たちが考えた秋の遊びを他の人にも楽しんでもらいたい。」という願いから、校内では「おもちゃ祭」で招待してくれた2年生。校外ではこども園の5歳児を招待することにした。

2年生には、遊びを楽しんでもらうだけではなく、5歳児さんとの遊びに向けてよりよくする工夫につながる感想を書いてもらった。感想は2種類(ピンクよかったところ。青アドバイス)の付箋に書いてもらい、それを基に思考ツールの PMI シート(図20)に整理した。しかし、おもちゃ作りの視点でのアドバイスがほとんどになってしまい、秋の魅力伝えるための遊びの改善には繋がらないと考えた。

P プラス よいところ	M マイナス アドバイス	I インタレストィング エフ
対象のいいところを記入する	対象のよくないところを記入する	対象の興味深いことやおもしろいポイントを記入する対象の改善点を記入する

図20 秋の遊びを見直すための PMI シート

そこで、児童に自分達の考えた遊びが「おもちゃ作り」を重視するあまり、人工物が増え、「秋の魅力」が少なくなっていることに気付かせる授業を計画した。(図21)

ゲストティーチャー(博士)が「みんなが最初に見つけたすてきなことを何だったのか?」と投げかけることで秋の魅力に立ち返ることができるよう促した。

その後 PMI シートを使い、グループで改善点を話し合わせた。(図22)シートに良い点とアドバイスが整理されていることで、自分が考えた遊びの良さと改善点を確認することができた。その後、5歳児さんとの交流に向けて秋の遊びの工夫を考えた。しかし、おもちゃ作りの工夫がほとんどで、秋の魅力を活かした工夫を考えるグループはなかった。PMI シートによりアドバイスが明確になった分、そこに書かれているおもちゃ作りの視点に流されてしまったと考えられる。思考ツールにより、考えが可視化される良さはあるが、使う目的と意図をはっきりとしてから使わないと混乱を招いてしまうことが分かった。また、秋の魅力とおもちゃの魅力という2つの視点が混在してしまったことで、何を基準にして話し合えばいいか分からなくなってしまった。そのため、話し合いに参加できない児童がでてしまった。

授業の中盤で指導者が秋の魅力を生かしたおもちゃとして児童 A の「相撲」を紹介した。(図23)その後、再開したグループの話し合いでは、秋の魅力を自分たちの遊びにどう加えていくかを話し合う姿が見られるようになった。

しかし、まとめの全体交流では「秋の飾りを増やしたい」という意見がほとんどで、秋の特徴(どんぐりの大きさや葉の色の違いなど)を活かしたおもちゃ作りの改善には繋がれなかった。

目的と意図を明確にして思考ツールを使わなければ、児童の思考に混乱を招いてしまうことが本実践から明らかとなった。また、「秋の魅力に浸らせたい」というねらいを指導者が常に意識し、単元を進めていかなければ、児童はねらいとは違うことに関心が移ってしまう。「この単元で身につけさせたい資質・能力は何なのか」ということを、単元構想を練る前にしっかりと定め、取り組んでいく必要がある。

	○主な学習活動・支援	・期待する子どもの姿や言葉 □評価規準(評価方法)						
導入	○前時に考えた本時の取り組みたい活動を思い出させ、学習課題を設定する	・2年生が楽しんでいるよかった ・もうちょっとこうしたいよと教えてくれたよ ・5歳児さんがたのしめるようにもっとおもちゃを工夫したい。						
	5歳児さんが楽しめるようにもっと遊びを工夫しよう							
展開	○2年生に遊んでもらい、書いてもらった付箋をもとにグループの遊びを見直す。 ・シートを使って、自分たちの遊びをもっとよくする方法を話し合う。①シートの付箋を見える。 ②どんなことが書かれているか共有する。 ・「ゲスト先生(生活科博士からのアドバイスをもたう)」 ・2年生の付箋をよかったところと博士からの視点をアドバイスに貼っておく。自分たちが感じたよかったところ・アドバイスを加えて話し合う。その後、くふうの部分にどのように改善していくのかを書く。	・マラスの音の違いに興味をもってくれたよ。 ・迷路の時間が短いかいいてあるね。 ・けん玉が難しかったといっていたな。 ・どうすれば5歳児さんが楽しめる遊びになるのかな。 ・ぼくたちのグループのすぐそばは好評だったから、もっと材料を増やそうよ。 ・時間を短くしたとアドバイスを言っているから、少し時間を長くしようか。 □自分たちが創った遊びを、ルールや用具を工夫して、園児さんが楽しめるように創り直している。愚弄表③(行動・発言)						
	<table border="1"> <thead> <tr> <th>よかったところ (ピンク)</th><th>アドバイス (青)</th><th>くふう</th></tr> </thead> <tbody> <tr> <td></td><td></td><td></td></tr> </tbody> </table>	よかったところ (ピンク)	アドバイス (青)	くふう				よかったところ:大きな声で話すのは分かりやすいです アドバイス:けん玉が難しく、全然入らなかった くふう:全員が大きな声で話せるように、セリフを練習します。けん玉の松ぼっくりを小さくして、入りやすくします。
よかったところ (ピンク)	アドバイス (青)	くふう						
	○全体で共有する グループごとに発表し、教師が板書でまとめていく。また、グループの課題の共通点からクラス全体の課題としてまとめていく。							

図21 2年生 生活科指導案



図22 PMIシートを使い遊びの工夫を考えている様子



図23 秋のおもちゃの相撲を紹介している様子

(3) 単元構想シート活用の単元構想と単元導入の課題設定を工夫した授業実践

「6年生 総合 単元名 してほしい みかみのこれから」1月～2月

研究協力校の地域は、少子高齢化が市内でも顕著に進んでいる。地域活動の衰退や伝統行事の担い手不足、学校の児童数の減少などの危機感を地域の人は感じている。そこで、現状の三上の人口割合などのデータからこれからの三上に起こりうる課題を児童が把握することで、地域のために自分にできることを考えてほしいと探究課題を「してほしい みかみのこれから」に設定した。それを基に、単元構想シートを活用し、単元の計画を行った。(図24)

子どもたちが追求したいと思える課題を見つけることが探究を進める原動力となる。そこで、2つの学区の人口割合を比較し、そこから疑問を生み出すように取り組んだ。図25は、A 町(隣の学区)、B 町(研究協力校の学区)のグラフである。このグラフを活用し、自分たちの考えとのずれを生み出す工夫を行った。その指導案が図26である。

本時では、導入場面では指導者のエピソード(住んでいたマンションの児童数の推移)からスタートした。その後、「人口の割合は、どうなっているのか興味を湧いたからグラフを作った。」と2つのグラフを提示した。グラフを基に児童が読み取った内容が図27である。少子高齢化視点の内容しかでないと予測されたが、児童からは働く世代(20～59)のABの比較やABに共通している点など数値の裏の情報に気づく姿も見られた。



図25 隣接する2つの学区の人口割合グラフ

OA 町に関して	OB 町に関して
・40～60歳が一番多い	・61歳以上が一番多い。
・年代が均等にわかれている	・61歳以上がやく半数をしめている
・19～39と61以上がだいたい同じ	・割合がばらばら
・40以下がB町よりも多い	・0～40歳よりも61歳以上が多い
・61歳以上が4人に1人なので、高齢化が進んでいない	・61歳以上がA町の2倍程度
・50%以上が40歳以上	・0～40歳の割合を足しても30%いかない。(悲しい)
・働く年代(20～39歳)が多い。	・他の年代を支えていく年代がA町よりも少ない。

図27 児童が人口割合のグラフから気づいたこと



図24 6年生総合 単元構想図

- 8 本時の目標
地域の人口割合のデータから地域の課題を把握し、自分たちが困っている課題を設定する。(思・科・表)
- 9 本時の「読み解く力」を養い、発展している姿(参観の視点)
地域の人口割合のデータから地域の課題を読み解き、調べていきたい課題を設定している姿
- 10 本時の基盤(1/12時間目)

※案内は、「読み解く力」のAの側面、波線は、Bの側面に開ける留意点

	〇主な学習活動・支援	予想される子どもの言葉 □詳細視察(詳細方法)
導入	〇教師のエピソードから人口の割合に結び付けて、2つの円グラフ(A:野洲小、B:三上小)を地域名は伏せて提示し、分かったことや感じたことを全体で発表する。	「Aは、高齢者が割合としては少ない、若い年代が多くて、活気がありそう、静かな。」「Bは46%60以上と上だ。子どもの割合も13%と少ない、高齢者中心の町、田舎かも。」
展開	〇個人でグラフからわかったことや感じたことなどをワークシートに整理して書く。 〇グループでまとめ、交流する 〇全体で発表し、共有する。	「地域は高齢化しているから、何歳になっても通ってやろう。」「Aは若い人が多いから都会かも。」「Bは田舎やな。これからもっと高齢者増えそう。」「A:田舎者が多くてやてい、感じはするから。」「B:お年寄りが多くてやてい、感じはするから。」「Bの方が田舎な感じがする。田舎が好き。」「野洲小のグラフも見て、三上の課題を考えさせる。」「三上って高齢者ばかりや。」「野洲小の方がええな。」「他、三上住みたくないって思ってしまった。」「〇地域の人口割合のデータから課題を設定し、解決に向けて自分たちにできることを考える。(発表・伝達) 課題 三上の割合が少なく、人口について調べたい。三上の今と昔の違いは、他の小学校区は? 最も高齢者が増える何かが悪いのか 子どもの少なすぎると三上小はどうなるのか。など 振り返り 三上が高齢者ばかりでびびりした。これからの三上の人口はもっと減っていくのかな。昔と今とどう違うのか気になった。
まとめ	〇疑問に思ったことや他に知りたくなったことを書き、発表する。それを基に次時の課題を設定する。	
	〇振り返りをする	

図26 6年生総合 指導案

また、児童 A は人口による利便性の違いを分かってもらおうと、仮の人口数に置き換えて説明する姿も見られた。(図28)

グラフに関する全体での意見交流の後に、「自分なら A 町と B 町ではどっちに住みたいか。」を個人でワークシートに記述し、全体で交流した。(図29)

A 町に住みたい(19 人)

同じ年代の割合に着目した理由

- ・若い人が多いから気が合う・同じ年が多い(遊びたい)
- ・子どもが少ないと楽しくなさそう

人口割合の均等さによる政策に着目した理由

- ・どの年齢にもあった町づくりをしていそう
- ・どの年齢にもあったイベントがあり、子ども向けが多そう

利便性に着目した理由

- ・人が少ないと店や公共施設などがなくなり、不便になったり、治安も悪化したりする

- ・近場で色々な買い物が出来そう・交通の便がよさそう

働く世代(20~59歳までに)に着目した理由

- ・0~40歳までの人が多いと子どもを増やしていけそう
- ・B町は頼れる人が少ない・若い人が少ないと、地域の活動ができない

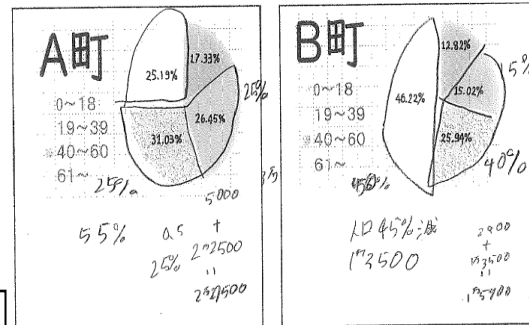


図28 割合を人口に置き換えているワークシート

B 町に住みたい(6人)

同じ年代の割合に着目した理由

- ・若い人が少ない方が考えを共有できそう(支え合える)
- ・若い人が多いとうるさそう

高齢者の割合に着目した理由

- ・お年寄りを助けたい
- ・大人が多いと安心(落ち着いている)
- ・昔の文化を聞ける
- ・伝統行事などが多そう

地域のつながりに着目した理由

- ・地域の助け合いがありそう

図29 児童が割合を基に考えた、住みたい町と理由

A 町では、利便性や同年代の多さに着目した理由が多く見られた。B 町では、高齢者が多いからその伝統や文化、地域の繋がりに着目した理由が見られた。総数としては A 町が 19 人。B 町が 6 人と圧倒的に A 町の人気が高かった。ここで、「実は B 町が自分たちの住んでいる地域だ」と知ると、児童は、驚きと共にたくさんの疑問を持つことができた。児童から出てきた疑問が図30である。

○他の学区等の割合について

- ・他の学区・市・国・外国の割合について・隣の学区なのになぜこんなに違いがあるのか・A 町の割合が均等な理由は

○自分たちの地域について

- ・少子高齢化の理由は・細かな年代別(1歳は何人等)の人口について・人口の総数はどのくらいなのか
- ・昔の人口や割合(いつから高齢化したのか)

○町づくりや少子高齢化の影響、防止策など

- ・割合が違うことによる文化や伝統の違い・働ける年代の割合が減るとどんな影響があるのか
- ・少子高齢化はそもそも悪いことなのか・違うこと(野球人口・月収など)に関するデータを調べたい
- ・どうすれば若い人が増えるのか・A 町は利便性が高いのに、0~18歳が17%しかいないのはなぜか。
- ・少子高齢化を止めるために自分達にできることは・人口の割合の違いによる建物や施設、政策の違いをしりたい

図30 児童が学習を通して感じた疑問

これから、個人やクラスとして探究していきたい課題を考えていききっかけとなる授業であったといえる。また、児童の振り返りで何人も「驚き」という言葉を使っていた。(図31)「今までの自分の考えとのずれや隔たり」を感じたからこそでた感想である。このような単元の導入が、探究を進める原動力となることを本実践から感じられた。

自分か住んでいる三上学区のクラブを見てこんなに少子高齢化が進んでいると知りおどろいた。少子高齢化の原因などについてまた知りたい

図31 振り返りでの児童の記述

(4) 総合学習の単元構想と思考ツールに関する教員と児童の意識の変容

市内の教員を対象に質問紙調査(7・8月実施)を実施した。また、研究協力校では児童と教員に始期(7月)と終期(1月)に実施し、変容を分析した。(図32)

「地域に合った探究課題を設定している」に対して「当てはまる」と回答した割合は始期で9%、終期で33%と変容が見られた。また、市内教職員の13%と比較しても高い割合となった。これは、コミュニティ・スクールを活用し、地域教材の掘り起こしをしたことや単元の見直しを図ったためであると考えられる。

また、「読み解く力のサイクルを意識して単元構想を考えている」や「読み解く力のサイクルを何度も繰り返して学習している」に対して「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答した割合が大きく増加し、市内教職員と比較しても高い割合となっている。このことから、単元構想シートを活用し、3つの視点を踏まえた単元構想を行うことで意識が向上したことが分かる。

しかし、児童への質問紙調査の結果(図33)では、「調べる→考える→発表する→振り返る→新しい課題を見つける」といった流れで学習している」に「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答した割合は、始期が95%だったのに対して終期は、86%と減少した。このことから、教員の意識は変容したが、児童の意識を変容させるまでの取り組みは実施できなかったと考えられる。児童が単元を振り返る中で、読み解く力の3つの視点を意識した振り返りを行うことで意識の変容に結びつくのではないかと考えられる。

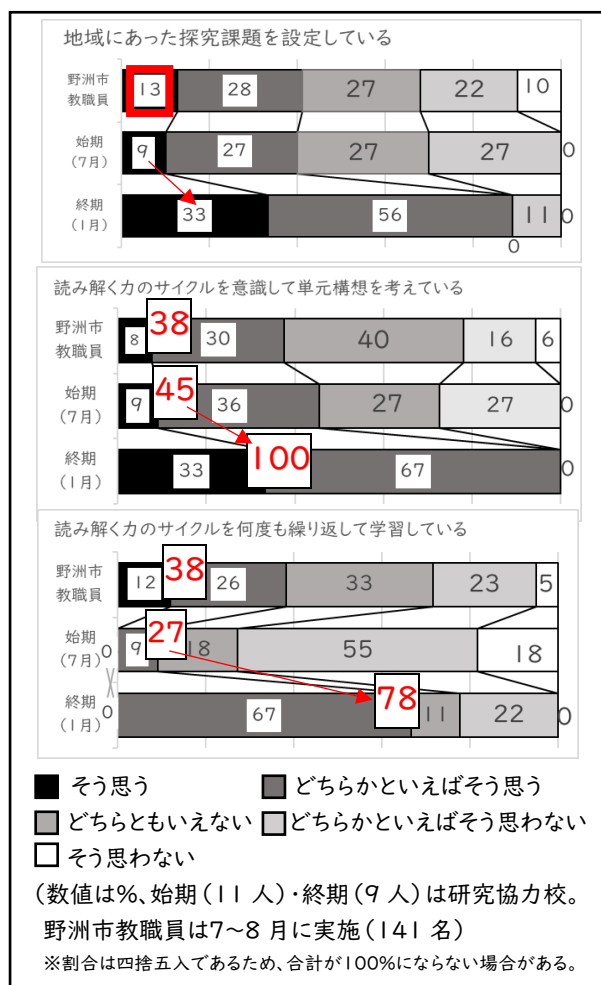


図32 教員への単元構想に関する意識調査結果

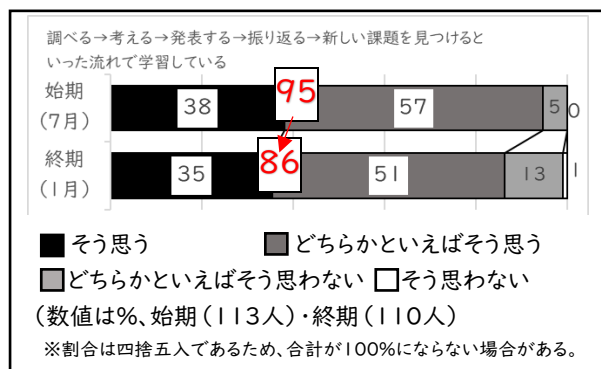


図33 児童への単元構想に関する意識調査結果

「思考ツールをよく使う」に対して「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答した割合が増加し、市内教職員と比較しても高い割合となっている。(図34) また、「そう思わない」と回答した割合が0%になった。このことから、思考ツールの研修等を経て、思考ツールを使った授業を実践したために意識が向上したことが分かる。

また、「思考ツールは考えを整理するのに有効だ」に対して「あまり当てはまらない」「当てはまらない」と回答した割合は0%であった。また、市内教職員と比較しても肯定的に捉えている割合は高い。しかし、「そう思う」の割合は変化していない。また、「どちらともいえない」と回答した割合は11%に増加している。このことから、思考ツールを使用したが、有効だと思えるほどの実践ができなかったのではないかと考えられる。

研究協力校の教員への自由記述の質問調査でも、思考ツールの使用方法や活用場面に課題を感じていた。(図35) 思考ツールを総合学習以外でも使用していき、活用場面の精選を行っていくことで有効に使えるようになると考える。

- ・思考ツールをどのように使えば良いかまだわからないままである。
- ・どの思考ツールが有効か、吟味して使うと比較的うまく行くという印象。教師がツールの使い方を熟知していないと、よさは実感できない。テーマによっては合わないツールもある。

図35 教員が感じた思考ツールの課題

児童への質問紙調査の結果(図36)では「思考ツールを使ったことがある」に対して「3回以上使ったことがある」割合が45%から57%に増加した。また、「全く使っていない」と答えた児童の割合は32%から11%に減少した。「思考ツールを使うと考えがまとめやすい」に対しては、始期と終期での大きな変化は見られなかった。しかし、思考ツールを使ったことがある割合が増加しているのに対して、意識の減少がないということは、思考ツールを使った児童は、考えがまとめやすいと感じているということが言える。思考ツールの活用回数を増やし、活用場面を精選していくことが今後の課題として挙げられる。

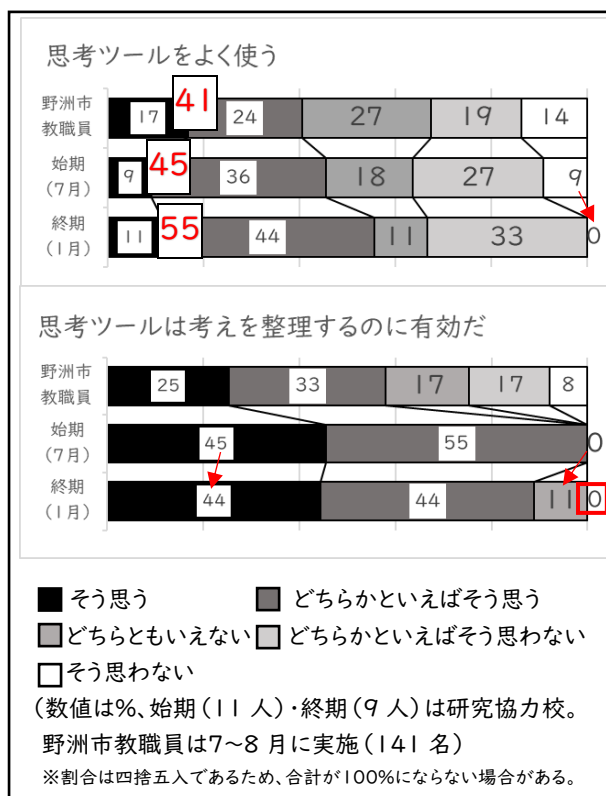


図34 教員の思考ツールに関する意識調査結果

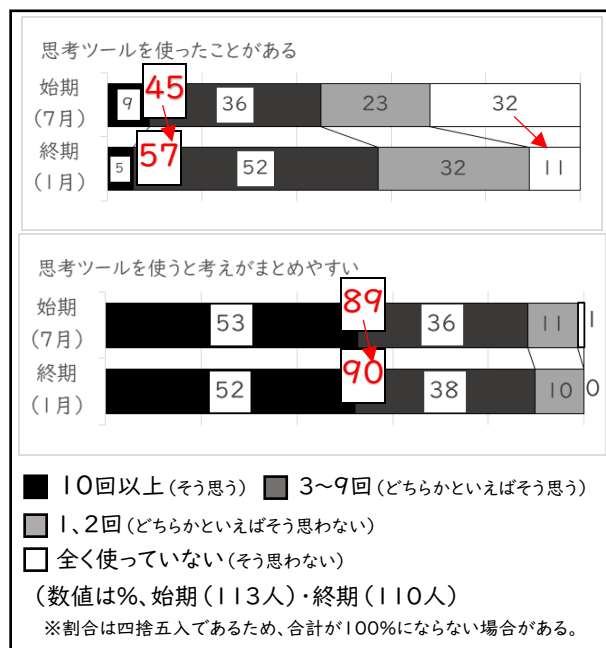


図36 児童の思考ツールに関する意識調査結果

Ⅶ 研究のまとめと今後の課題

1 研究のまとめ

- (1) 指導者が「読み解く力の3つの視点」を踏まえた単元構想シートによる単元構想を行う中で、探究のサイクルを意識した単元構想の立案を意識することができた。
- (2) コミュニティ・スクールを活用し、地域教材や総合学習の探究課題を見直すことができた。また、地域の人口割合を基にした課題設定を行ったりすることで、地域に根差した総合学習に変容していくきっかけとなった。
- (3) 指導者が思考ツールを授業で使ってみることで、良さや課題を感じることもできた。また、思考ツールを使用した児童の割合が増加し、使用した児童は、考えを整理するためのツールとしての良さを実感することができた。
- (4) 研究協力校で授業実践を重ねる中で、3つの視点を意識して単元構想を立案したり、思考ツールの活用を全学年で取り組んだり、単元導入に用いる資料を精選したりすることで指導者の総合学習や思考ツールへの理解が深まった。これにより、研究協力校では、総合学習の全学年での単元導入に用いる資料の精選やまとめ・表現での校外への発表など今後取り組んでいく課題を見つけることにつながった。

2 今後の課題

- (1) 単元構想シートの活用により指導者の総合学習の単元構想に対する意識の向上は図れた。しかし、児童がその変容を実感したり、探究の良さを感じたりするまでには至らなかった。児童と共に単元計画を立案したり、単元を終えた後に振り返りをしたりすることで、児童に探究の過程を意識させる必要がある。
- (2) 総合学習を児童・生徒が主体的に進めていくためには、導入の課題設定が重要であると感じた。6年生の実践では、その兆しを感じることもできた。しかし、まだまだ指導者主導の単元構想となってしまった。導入場面で提示する資料やデータ、体験活動等を精選し、児童が今までの自分の考えとのずれや対象へのあこがれを感じることができ課題設定を実現する必要がある。
- (3) 思考ツールはあくまでもツールである。そのため場面によっては適さないこともある。総合や生活科だけに限定せず、様々な教科で横断的に思考ツールを活用していくことで、適した活用場面を見出していける。それを蓄積し、まとめていくことで市内の教職員に広めていきたい。
- (4) 単元導入の工夫や思考ツールの活用により、児童・生徒が自分の思いや願いを持ったり、考えを整理したりすることができた。しかし、クラス全体でその考えを共有し、分析したり、課題を設定したりすることはできなかった。そのため、来年度は板書を活用することで、児童・生徒の考えを整理・分析したり、振り返りを生かした課題を設定したりすることに取り組んでいきたい。

文 献

- ・文部科学省「小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 生活編」(2018年)
- ・文部科学省「小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 総合的な学習の時間編」(2018年)
- ・文部科学省「今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開」(2021年)
- ・田村 学 黒上 晴夫「考えるってこういうことか!思考ツールの授業」(2013年)

研究協力校
野洲市立三上小学校